川原田さんの園芸場・確実園で販売されている色とりどりのアジサイ。花のように見える部分はおしべとめしべがない飾りの花（装飾花）なんだよ。

昔はきらわれ者だった!?

アジサイの大逆転!!

梅雨の時期の主役ともいえるアジサイ。しかし、意外な過去が!?

「アジサイは昔、人気のない花でした」と教えてくれたのは、園芸研究家・川原田邦彦さん。

「色も地味で、花びらの数が4枚で〝死〟を連想させる。また、色が変わることも心変わりとみなされ、嫌われていたんです」

人気が出てきたのは、日本原産のアジサイが江戸時代にヨーロッパに紹介され、品種改良が進み、それが明治時代に逆輸入されたから！ ヨーロッパで人気が出たのには、色の変化にヒミツがあるよ。

日本は酸性の土壌が多く、この土から水を吸ったアジサイは青い花をつけることが多かった。しかし、ヨーロッパはアルカリ性の土壌が多く、同じアジサイにもかかわらず、赤い花をつけたんだ。これをヨーロッパの人たちは「東洋のバラ」と呼び大絶賛。品種改良が盛んに行われ、園芸用の花として親しまれるように。派手になったアジサイは、日本でも徐々に人気になり、ここ30年の大ブームを巻き起こすようになったそうだよ。

「色の変化はもちろん、種類が多いのも、アジサイの大きな魅力。お気に入りの品種を見つけて、ぜひ育ててみてほしいです」

土壌の性質で変化！

アジサイの色を変える主な要因は土壌の性質。性質は、液体が酸性かアルカリ性かを示すｐＨという単位で表すよ。ｐＨは１～14までの値があり、７が真ん中で中性、７より小さいと酸性、大きいとアルカリ性となるよ。アジサイは、酸性だと花が青色に、アルカリ性だと赤色になるんだ。「赤色の株を買ってきて植えても、次の年に咲いたら青色だったなんてこともあります。これは土壌が酸性だからなんです」（川原田さん）

魅惑のアジサイ七変化

川原田邦彦さん

茨城県で確実園を営み、アジサイ博士としてＴＶにも出演。「色のコントロールはプロでもむずかしいです。白い品種なら、土壌の性質にかかわらず白いままなのでおすすめですよ」

酸性

日本でよく見るのが青。お寺で咲いているのはこの色が多い。

アルカリ性

アルカリ性の石灰が使われるブロック塀の近くだと赤色にもなる。

時期で変化

つぼみが開く前から開いたころ、アジサイの花は緑色をしている。そこから徐々に色付いていく。花が終わるとまた緑になり、青い花だったとしても最後に少し赤や紫になった後、茶色く枯れていくよ。

紫外線で変化

土壌の性質では変化せず、紫外線で色が変化するアジサイもあるよ。ヤマアジサイの「クレナイ」という品種は最初は白く咲き、日光に当たると赤くなる。しかし、日光に当てず日陰に置いておくと白いままなんだ。白の当たり方で葉も少し赤くなるよ。

プレゼントとしても人気急上昇！

今では日本でも外国産の品種をもとに、さらに新しい品種が生まれているよ。特に「万華鏡」は、新しいアジサイを生み出す、育種家の人たちによって作られ、プレゼントとして、とても人気を集めている。一方で、江戸時代からある「ウズ」のような日本古来の品種も注目されているよ。

ウズ

装飾花の花弁が丸く、内側に巻いている。青もあるが、ピンクは「梅花咲き」と呼ぶ。

万華鏡

八重の装飾花が特徴の新しい品種。淡い水色がきれいで徐々に青が深くなる。

撮影／タナカヨシトモ　写真／PIXTA　デザイン／タナカデザイン